

～戴帽式を終えて～

異例の式形態ではありましたが、コロナ状況の中でも、今日このような素晴らしい戴帽式を迎えさせていただいたことに感謝の気持ちでいっぱいです。入学当初は、看護師になるという目標を叶えるための第一歩を踏み出せる喜びと、患者さんに優しく寄り添い心身ともに支えられる看護師になるという思いを胸に抱いていました。しかし、入学から半年経った今、その思いはただ漠然としたものに過ぎないのだなと気づきました。今、私たちは様々な講義や授業を通して、患者さんに看護を提供するにあたって重要なことを多く学んでいます。知識や技術など吸収しなければならないことが本当に多くありますが、根本的に最も重要になってくるのが、患者さんをあらゆる側面から観察し、どんな些細な変化にも気づき、それを基に対象者の個別性にあった看護を提供す



第88回生 兼崎 美羽

ることだと思います。変化に気づくことの重要性はナイチンゲールが『看護覚え書き』の中で述べていることでもあります。今月末から初めての実習が始まり、このような未熟な私に何ができるのか不安な気持ちでいっぱいですが、患者さんの言葉や行動から、思いを汲み取り、患者さんにとって適切で心地のよいケアを提供できるように頑張りたいと思います。

戴帽式を終えた私たちは、改めて人の命を預かるという“責任”の重さを実感しました。この責任と使命を胸に、これから先、道を歩んでいこうと思います。また、“看護”というものを見失いそうになった時、今日の戴帽式を思い出し、初心に返って“看護”を見つめ直すきっかけとしたいと思います。

